わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 66

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

映画「接吻」にみる恋ごころ

万田邦敏監督の「接吻」はあらゆる意味で衝撃的な映画である。無差別殺人を犯した坂口（豊川悦司）をテレビで観た瞬間、その笑顔に魅せられたOL遠藤京子（小池栄子）は恋に落ちてしまう。そこに坂口の弁護士である長谷川（仲村トオル）が微妙にふたりに関わっていく、という内容である。小池栄子というのはバラエティー番組でしか知らない人であったが、明らかに他の同年代の女優より秀でたものがあることを証明してみせた。

平凡で身内とも同僚とも疎遠な京子は、坂口に対し恋というより運命を感じる。この人こそが自分の求めていた人だと確信し、獄中の彼に差し入れをしたり、手紙を書いたり、事件の記事をスクラップしたりするのである。暗くて何を考えているかわからなかった京子が、生き生きとした表情を見せ、目が輝き、まさしく恋する女にあっという間に変わっていくのが手に取るようにわかる。最初戸惑いを感じていた坂口も、次第に心を開いていき、とうとう獄中結婚までするに至る。もちろんこれは京子からの熱望ゆえのことである。

映画のストーリーは、実話をヒントにしているという。…ときけば、即座に一連の事件を思い出す人も多いだろう。関係者にしてみれば耐えられない内容だ、とのレビューも目にしたが、しかしそのようなことはあまり珍しいとはいえない。愛人のために勤め先の銀行のお金を横領し、海外へ逃亡した女性に対しても、逮捕後求婚が殺到した話があった。横領と無差別殺人とは犯罪の質がまったく違うが、恋ごころを抱く瞬間には、たいした相違はない。恵まれなかった幼い環境に同情したとか、顔が好みだったとか、およそ恋の始まりというのはそんなことである。犯罪の中身にこだわっているようでは恋は始まらないだろう。

さて、このような主人公の気持ちは素直に理解することができない、と思うかもしれない。会ったこともなければ話をしたこともない。ただテレビの画像で男を見ただけでこれほどまでに好きになってしまうような女性は、少なくとも身近には知らない。しかし、人を好きになる気持ちは誰もが理解できるだろう。ハタからみれば、いい男（女）でも何でもないのに、たまらなく好きになり何もかも失くしてでもついていきたいと思ったことがないとすればそれはむしろ不幸である。相手が殺人犯であろうと言葉の通じない外国人であろうと、恋には理屈も原因もなく、ただあるのは熱く息苦しいほどの切なさだけなのだ。

この映画は怖い。恋は「狂気」であることを改めて見せつけられるし、場合によっては「凶器」にもなる。もっと怖いのは、彼らを訳知り顔でコメントするワイドショーのコメンテーターたちやマスコミの人々がものすごくつまらない人間に見えてくることだ。つまり、世間とは実にばかばかしいどうでもいいもので、人を恋する気持ちこそが尊いのだという気になってくる。ただひとり冷静だった弁護士長谷川さえ次第にその狂気に身を投じていく様は、これまた二重の恐怖を呼び起こさせるほどに恐ろしい。

久々に見ごたえのある邦画であった。その分、半身をどこかに置き忘れたかのような落ち着きのなさが重く残る。まさに大人の「ホラー」と呼ぶにふさわしい。

イラスト・三浦義雄